



単元構想の具現の指導計画

各学校、また各地域でさまざまな研修会が行われ、研究授業も数多く実施されている。少し前の基礎的・基本的な内容の習得方法に過熱した時期から、子どもの主体的な探究を通して、学習仲間と学び合い、教え合う授業の研究にシフトしてきているように思う。これは、子どもの学びとは何か、という問いに正面から応える傾向と歓迎している。

しかし、学習指導案を見ると、この構えとの整合に多少の疑問を感じることもある。子ども観・教材観・指導観の3観点から、教師の本単元に対する設定意図を述べ、何を分からせ、どんなことを身に付けさせるか、理解・能力・態度面から指導目標を決めていく。大切なのは、ここまでの教師の意図や願いが、次に書かれる指導計画に明確にされているかどうかである。

指導計画は、文字通り本単元の学習内容を、どのような順序でどのくらいの時間をかけて指導していくか、その過程を示す教師の計画である。教師の計画だからと言って、子どもの実態を無視しているわけではない。教師の学ばせたいことを限りなく子どもが学びたくなるようにする計画書である。このように子どもの側で、主体的に学ぶ姿を想起するわけだから学習計画とも言うことができるし、一般的には、学習者の立場で表記することになる。

10年以上前に、3年生社会科単元「わたしたちのくらしと商店・商店街」で、以下のような指導計画を立てた。振り返ると、大変概略的であり、教師の意図や子どもの学ぶ姿が読み取りにくい。もっと不備な点は、例えば子どもの活動が第1次(つぐ)から第2次へと、意識が連続・発展する動機が分からない。さらに、決定的なのは、学習問題を追求していく子どもたちの評価計画がない。評価計画は、筆者の頭の中にあったと言うしかない。

このような指導計画を今でも、時に目にすることがあるが、数年前から、

指導計画 (19 時間)	
第1次	1週間の買物調べを基に、自分の生活と店のかかわりを話し合う。……………5時間
第2次	スーパーマーケットの人々の販売工夫を調べる。…………… 6時間(本時5/6)
第3次	身近な商店街の組織的な協力や販売工夫を調べる。……………5時間
第4次	品物の選び方や今後の店に対する自分の考えをまとめる。……………3時間

単元全体を通して子どもが主体的の学んでいく姿を書いていく指導案を多く見るようになった。子どもの追求する意識の流れを想定していくのである。しかし、学習指導案に、これが正しい書き方というものはない。これまでの先輩が、授業中の支援の拠り所にしたり授業研究に役立てたりするものとして、また、その時代に求められたものを織り込んで、有効な学習指導案としたものが脈々と引き継がれているだけなのである。したがって、学習指導案の形式自体が研究対象にもなり、流動的である。

以上のことを考え、現在は「指導計画と評価計画」とし、指導と評価を一体的にとらえ、以下のような形式で単元を構想している。

指導計画と評価計画（全〇〇時間）

学習活動・学習内容	予想される子どもの学びの道筋	支援と評価
<p><第1次> 〇〇〇〇〇〇 (〇時間)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>本次の活動で身に付けさせたい学習内容</p> </div> <p><第2次> 〇〇〇〇〇〇 (〇時間 本時〇/〇)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教材の本質にかかわる中で、実感したり納得したり、また感動したりする子どもの予想される内面を書く。 ・ 実際場面で予想をできる限り予想し子どもの学びを柔軟にとらえることを可能にするところに予想する意義を感じている。決して、この道筋を強制するのではない。 ・ 次と次の関連の中で子どもの追究への意識の連続発展が書かれるとよい。特に、本次の最終意識がつぎにつながるよう注意する。 ・ 左の学習活動との整合に注意する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 毎時間の支援を書くとき、本時と重なるので、ここでは、次(つぐ)ごとに必須の支援を書く。 ○ 何故、このような支援をするのかその根拠を書く。(～のために、～させる。) ● 評価については、以下のような手順を踏みたい。 <ol style="list-style-type: none"> ① 教科・学年の評価規準の趣旨を参考に内容のまとまりごとの評価規準を決める。 ② 内容のまとまりごとの評価規準から単元の評価規準を決める。 ③ さらに、学習活動における具体的評価規準を決める。 ④ この学習活動における具体的評価規準をもとに、ここに評価指標としての評価基準を評価方法とともに書いていく。

これは、あくまでも一例であるが、指導計画に評価計画を入れて考えることは非常に重要である。実は、適切な評価しているから、適切な指導が行われることを授業者は忘れていないのではないかと危惧する。また、評価は客観性や信頼性を高めることが必要である。そのためには、子どもの事実や成長を丁寧に見取っていくことが、何より効果的なのである。さらに、簡便性と継続性も重視したい。我々は、たくさんの教科を指導する。毎時間、4観点から評価しようとしても、現実的でないことは自明である。長い目で評価ができるように、無理のない計画のもとで評価することが、結局、客観性や信頼性を高めることになるのである。

この近年、学習指導案が書けない教師が増えてきた気がする。「指導案を書くより、子どもと接することが大切である。」と、耳を疑う発言を聞いたことがある。教師の大切な仕事を放棄しているとしか思えない。学校の情報公開や説明責任という観点から、保護者・地域住民に授業を公開することが増えたと思う。良いことと思うが、内に授業を開いているかと言うと、疑問である。もっと、学習指導案を書いて、同僚に授業を開き、子どもの姿から、授業を振り返りたい。次時からは「子どもの歩みと指導計画・評価計画」として、子どもの学習履歴を入れ、子どもの前に立ちたいものだ。学習指導案を書くことを嫌がらない教師を目指したい。

(芝)